

[成果情報名]イチゴ「ゆめのか」における収穫の中休み軽減技術

[要約]「ゆめのか」の暗黒低温処理栽培で9月下旬からの局所温度制御、または50%遮光黒寒冷紗被覆を行うと花房間葉数が減少し、第1次腋花房の収穫開始が早くなり、2月までの収量が増加する。特に局所温度制御の中休み軽減効果が高い。

[キーワード]イチゴ、ゆめのか、中休み、寒冷紗、局所温度制御

[担当]長崎県農林技術開発センター・農産園芸研究部門・野菜研究室

[連絡先](代表) 0957-26-3330

[区分]野菜

[分類]指導

[作成年度]2017年度

[背景・ねらい]

本県におけるイチゴ品種は、農家所得の向上を目的に、「さちのか」から多収で輸送性に優れる「ゆめのか」への転換を図っている。その中で農林技術開発センターでは早期出荷と多収生産を実現するため、暗黒低温処理による収穫前進化技術の開発を進めてきた。暗黒低温処理は本県「ゆめのか」の主要な作型として普及し、年内収量の増加に寄与しているが、2015年には県下全域で第1次腋花房の収穫が遅れ、1～2月に出荷量が減少したことから、収穫の中休み軽減が課題となっている。

そこで「ゆめのか」の第1次腋花房収穫前進化を目的に、第1次腋花房花芽分化期の局所温度制御と寒冷紗被覆による中休みの軽減効果について明らかにする。

[成果の内容・特徴]

1. 「ゆめのか」の暗黒低温処理栽培で、定植35日後の生育は、9月下旬～10月中旬まで50%遮光黒寒冷紗を被覆すると第3葉葉長が無処理より長くなり、9月下旬から10月下旬まで16℃～18℃の冷水で局所温度制御すると無処理より短くなる。第3葉の葉身長および葉幅は同等となる(表1)。
2. 頂花房の出蕾日、開花日、収穫開始日は同等で、頂花房と第1次腋花房間葉数は無処理より局所温度制御、50%遮光黒寒冷紗とも減少し、第1次腋花房の収穫開始日は局所温度制御で最も早くなる(表2)。
3. 年内収量および総収量は同等であるが、局所温度制御、50%遮光黒寒冷紗は2月までの早期収量が増加する(表3)。
4. 局所温度制御、50%遮光黒寒冷紗被覆により2月の収量が増加し、各月の収量は平準化する(図1)。

[成果の活用面・留意点]

1. 寒冷紗被覆は葉長が伸びやすいため、マルチングの作業性が悪くなることに留意する。
2. 導入コストは黒寒冷紗で20万円/10a、局所温度制御装置で250万円/10a程度である。

